羊と鋼の森 (3)

(ピアノ調律師の見習いをしている「僕(外村)」は、あるとき、店の顧客である佐倉家のふたご・和音と由仁のピアノの調律に失敗してしまいました。)

「生意気かもしれないけど、やろうとしてること、すごくよくわかったんです。凛とした音でした。欲しかった音だ、って思いました。だから、うまくいかなくてもぜんぜん嫌な感じじゃなかった。たぶん、もうちょっと、ほんのちょっとの何かなんだと思います」

和音も口を開いた。

「私もそう思います。いくらうまくまとまってたって、全部冴えない音に合わせられちゃったらがっかりだもの。これくらい挑戦してる音、私も好きです」

挑戦か。僕は何に挑戦しようとしたのだろう。①唇を噛むしかない。挑戦などしていない。ただの身の程知らずだった。

「申し訳なかったです」

頭を下げたとき、思いがけず涙が滲みそうになった。

「明日の朝、柳が——いつもの調律師が、来ます。ほんとうにすみませんでした」

「いいえ、無理に頼んだのはこっちですから」

もう一度謝ってから、部屋を出た。②鞄がやけに重かった。ぜんぜんだめだ、と思った。(中略)

夜になって、急激に気温が下がっていた。フロントガラスが曇る。のろのろと運転して、クラクションを何度も鳴らされながら帰った。

店に戻ると、一階のシャッターは下りているものの、二階にはまだ電気がついていた。そう遅い時間ではないが、ピアノ教室が入っていない曜日には、六時半に店を閉めてしまう。人が残っていないといいと思った。

通用口から入って、二階へ上る。二つ提げた鞄が重い。誰もいないことを期待してドアを開けると、③今日に限って板鳥さんがいた。出先から戻ったばかりなのか、外出用のジャケットを着ている。まともに顔を見ることができなかった。あんなに憧れたのに。板鳥さんから学びたいことがたくさんあったはずだったのに。僕の技術は未熟などという域にさえ達していない。板鳥さんに教われることなど何ひとつないだろう。

「お疲れさまでした」

穏やかな声をかけられて、いえ、としか言えなかった。それ以上口を開くと気持ちが崩れてしまいそうだった。

(宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋 による)

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「唇を噛むしかない」とあるが、このときの「僕」の様子として適当なものを選びなさい。

ア 調律がうまくいかなかった以上ふたごに反論するわけにもいかず、おとなしくその場をやり過ごしている。

イ ふたごの言葉に励(はげ)まされ、自分がどのような音の調律に挑戦しようとしたのか自問自答している。

ウ みずからの技量もわきまえずに調律をしようとした自分がなさけなく、くやしさをこらえている。

〔　　〕

(2) ――線②「鞄がやけに重かった」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 調律に失敗してしまった「僕」が、深く気を落としていること。

イ 調律に必死に取り組んだ「僕」に、ふたごが感謝していること。

ウ 調律に挑戦した「僕」が、なにか大切なものをつかんだこと。

〔　　〕

(3) ――線③「今日に限って板鳥さんがいた」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう店を閉めてしまう時間だったが、いつものように板鳥さんが残っていたということ。

イ 調律に失敗し誰にも会いたくないときに、よりによって憧れていた板鳥さんがいたということ。

ウ 自分が調律について学びたいときに、都合よく出先から戻ったばかりの板鳥さんがいたということ。

〔　　〕